

新選組の沖田総司は、千駄ヶ谷の池尻橋にあった植木屋平五郎の宅で亡くなったが、平五郎の先代は増田繁亭金太の奇品仲間であった。

「草木奇品家雅見」では、巻之下十一丁裏に「南寺町 平五郎」の「七変化椿」の奇品が写されており、「草木錦葉集」では、巻之五 十六丁裏に「平五郎七化（椿）」が写され、同十四丁表に「元下り四谷 平五郎」と記されている。植木屋平五郎は、文政年間には四谷にあり、その後、権田原から移った繁亭金太と同様に千駄ヶ谷に居を構えたと考えられる。

沖田総司が江戸に戻った頃、繁亭金太は既に亡く（文久2年1862年没）、三代目増田金太郎（金六）が隠居して四代目増田謹三郎に家督を譲っているが、幕府のある筋から沖田総司を匿うように頼まれたのは、三代目増田金太郎（金六）である。

さすがに増田家では無理で、知古の間柄であった植木屋平五郎に依頼しているが、下に掲載した江戸切り絵図で明らかな様にほとんど隣同士である。この池尻橋を千駄ヶ谷側から四谷側に渡ると、大番町の水野忠暁翁の旧宅（絵図の水野藤七郎宅）や関根雲亭宅（この図では切れている。）と指呼の距離である。

後年、四代目増田謹三郎は、五代目に「新撰組」由来の「誠」の一字を与えて「増田 誠」とした。筆者の祖父である。また、徳川宗家、紀州徳川家に対する思い入れが強く、薩長明治政府に批判的な勢力を抱え込み、キリスト教徒の活動家や、幸徳秋水、菅野スガ（須賀子）までを援助したのは別に述べた。

増田家は、この池尻橋に近い千駄ヶ谷の土地が明治初期に徳川家達公、天璋院篤姫の住まいである徳川邸になった以後は、やはり植木屋の多かった四谷荒木町に一時居を移し、その後、千駄ヶ谷葵橋の地を住まいとしていた（叔父がこの地を去ったのは、平成14年）。

幸徳秋水や菅野スガが「投てき訓練」をしたのは、この千駄ヶ谷葵橋の増田家である。

因果なことであるが、筆者の祖母が代々木2丁目と町名変更した葵橋際に増田ビルを昭和39年に建築し、叔父がその1階で「ダフネ」という喫茶店のマスターをしていたが、まさに明治末年の大逆事件の直前の「投てき訓練」がなされたその場所で、昭和50年に左翼の「打ちゲバ」事件が発生した。

一方で、増田謹三郎の娘は、監視役の特高刑事に嫁いでいる。

幕末の動乱は形を変えて戦後30年の増田家まで影響を及ぼした。（2008. 5. 28、2008. 5. 29補訂）

（参考文献＝架蔵本）

- ・ 「草木奇品家雅見」文政10年（1827年） 増田繁亭金太
- ・ 「「草木奇品家雅見」解説」昭和51年（1976年） 青青堂出版（復刻版「草木奇品家雅見」附）
監修者 岩佐亮二、執筆者 塚本洋太郎、前島康彦、笠原基知治、横井政人、広瀬嘉道、芦田潔
- ・ 「草木錦葉集」文政12年（1829年） 水野忠暁
- ・ 「草木錦葉集・解説」昭和52年（1977年） 青青堂出版
監修者 塚本洋太郎、校閲者 北村四郎、執筆者 芦田潔、岩佐亮二、岡村はた、広瀬嘉道、前島康彦、横井政人
- ・ 「千駄ヶ谷・鮫ヶ橋・四ツ谷絵図」文久3年 金鱗堂尾張屋清七版
- ・ 「菅野すがー平民社の婦人革命家像ー」昭和45年（1970年） 絲屋寿夫 岩波書店
- ・ 「花葵 徳川邸おもいで話」1998年 保科順子 毎日新聞社
- ・ 「新選組紀行」平成15年（2003年） 中村彰彦 文藝春秋

次に、文久3年版の金鱗堂尾張屋清七版「千駄ヶ谷・鮫ヶ橋・四ツ谷絵図」の一部を再掲する。

図中央右の橋が池尻橋でこの地に植木屋平五郎の屋敷があった。図中央の「百姓地」と紀州家下屋敷の千駄ヶ谷八幡寄りが増田繁亭金太の居宅。「百姓地」は現在の東京体育館で、明治初期に徳川家達公、天璋院篤姫の住まいである千駄ヶ谷徳川邸になった（図の右が北の方角）。



Copyright (C)2008 増田信敬 (masuda nobutaka) All rights reserved
<http://soumukihinkagami.com/>